琉球大学学術リポジトリ

徐葆光『中山傳信録』の寄語と琉球語について

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-06-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石崎, 博志, Ishizaki, Hiroshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17068

徐葆光『中山傳信録』の寄語と琉球語について

On the sound system of Chinese annotations in "Zhong shan chuan xin lu".

石　崎　博　志

目次

§1　はじめに－分析対象の限定
§2　『傳信録』における寄語の変更
§3　寄語が基づく漢字音の体系
3.1 寄語全般の傾向
3.1.1 入声韻
3.1.2 陽声韻
3.2 確実な例からの推定
3.2.1 ア段音に対する寄語
3.2.2 ウ段音に対する寄語
3.2.3 イ段音に対する寄語
3.2.4 清代の方言における尖音、団音
3.2.5 琉球語の濁音に使われる寄語
§4　『傳信録』の示す琉球語
4.1 キとチについて
4.2　r音の脱落
4.3　ハ行・バ行の発音について
4.4　前舌母音化を示す語
4.5　寄語"崚"に関連した琉球語
§5　おわりに

§1　はじめに－分析対象の限定

漢語資料から琉球語の史的変遷を辿る時、もっとも注意を要するのが、資料相互の継承関係である。陳侃『使琉球録』「夷語附」、「琉球館訳語」、郭汝霖『使琉球録』「夷語附」、周鐘『音韻字海』「附録夷語音釈」、宋濂『篇海類篇』、『海篇正宗』、蕭崇業『使琉球録』「夷語附」、夏子陽『使琉球録』「夷語附」、徐葆光『中山傳信録』「琉球語」、潘相『琉球入學見聞録』「土音」は一般に先行資料を踏襲して編纂されるため、僅かな差異を除きその記述は大同小異となる。そのためこれらの言語資料から帰納して得られる言語体系は、必ずしも資料の成立年代当時の言語を反映しない。よってこれらの資料からなにがしかの言語事実を抽出するためには、継承された箇所と増補された部分を峻別しなくてはならない。

ここに康熙五十八、九年（1719, 1720）の冊封副使徐葆光の手になる『中山傳信録』（康熙60年（1721）二友斎刊本６巻　以下『傳信録』と略称）がある[1]。巻六の巻末に「琉球語」と題して琉球語の発音を漢字で記している。しかし、これも全て徐葆光が自ら採集したものでなく、『傳信録』の「琉球語」は先行資料に基づく。以下、徐葆光の言葉を引用してみよう。

臣按、前明嘉靖中冊封使陳侃記云、稱有夷語夷字附錄卷末、所傳鈔本缺而未見、萬曆中冊使夏子陽給諫使錄、刻有琉語、本朝張學禮冊使亦略載雜記中、今就其本少加訂正。對音參差輕重清濁之間終不能無訛也[2]。

上記ではやや控えめな表現にとどまっているが、他の使録の「夷語」と比較すると訂正を加えた箇所は質、量ともに最大である。そして、従来の使録にお

---

[1] 『中山傳信録』のテキストについては和田1987、岩井1999に詳しい。

[2] 原田訳：臣が前明の嘉靖年間の冊封の陳侃の記をみると、「夷語夷字を卷末に附錄する」と、あるが、現在伝えられている鈔本は、それが欠落していて、まだ見られずにいる。万暦年間の冊使の夏子陽給諫の使録には、琉語が刻まれている。本朝の張学礼の冊使もまた、ほぼ『雑記』に載せている。このたび、それらの本について、少しく訂正を加えた。表音に出入りが多いうえ、軽重や清濁があり、そのままの音を伝えることはできなかった。

ける「夷語」に訂正を加えた箇所こそ、18世紀前半の言語環境に基づいてなされた可能性が高い。本稿の分析対象は『傳信録』の「琉球語」の全体でも、ましてや先行資料から書き写された部分でもない。18世紀前半の言語状況をより明確にするため、『傳信録』における初出の項目に限定する。

では、具体的にどの箇所に訂正が加えられているのか。第一に先行する資料に存在しない提示語と寄語がそれに該当する。これは実に251項目にのぼり、全体の40％を超える。第二は他の「夷語」から継承された提示語に対し、異なる寄語を用いて修正している項目である[3]。

もちろん、先行する資料に存在しない項目でも必ずしも『傳信録』の独自性があると見なされない例もある。また、資料には単純なる誤記と思しき項目も多く、修正の結果が正しいとは限らない。また、誤記ゆえに『傳信録』に続く『琉球入学見聞録』で削除されているものもある。これらに関しては分析対象から除外する。

§2　『傳信録』における寄語の変更

では、『傳信録』ではどのような変更が加えられたのかまとめてみよう。寄語が変更されている項目をみると、おおよそ以下の目的で変更が行われたと思われる。

1，発音の訂正

2，語義の訂正

3，大和言葉からウチナーグチへの訂正

1の発音の訂正から実際の例をもとにみてみよう。以下の例では、主に2字で書き表していた撥音を含む琉球語を、陽声韻（韻尾に鼻音をもつ音節）の寄語で書き直している。

---

[3] 逆に先行資料には存在するが、『傳信録』に記述されていない項目も多数ある。これは如上の「所傳鈔本缺而未見」という事情に依るのであろう。

提示語	陳侃	琉譯	夏子陽	蕭崇業	傳信録	変更点
天	甸尼	甸尼	甸尼	甸尼	町	2字＞1字
地	只尼	只尼	只尼	只尼	池	2字＞1字
上	吾乜[4]	吾乜	吾乜	吾乜	威	2字＞1字
狗	亦奴	亦奴	亦奴	亦奴	因	2字＞1字
子	烏哇	烏哇	枯哇	枯哇	括	2字＞1字
飯	翁班尼	翁班尼	汪班尼	汪班尼	呿班	3字＞2字
虎	它喇	它喇	它喇	它喇	土拉	タラ＞トラ
墨	思墨	思墨	司默	司默	細米	スモ＞シミ
菜	菜	菜	菜	菜	綏	ツァイ＞セイ

2．語義の訂正

提示語“日”に対する寄語の変遷

提示語	陳侃	琉譯	夏子陽	蕭崇業	傳信録	変更点
日	非禄	非禄	飛陸	飛陸	飛	ヒル＞フィ

提示語の“日”は確かに「ヒル（昼）」の意味もあるが、提示語が天、日、月、星・・・と続くなかでは、「ヒル（昼）」よりも「日の光」を表す「ヒ（日）」がより適切である。こうした変更の類例に以下のようなものがある。

提示語	陳侃	琉譯	夏子陽	蕭崇業	傳信録	変更点
葉	尼	尼	尼	尼	豁（ハ）	根から葉
門	謹那（？）	勤那	郁	郁	濁	不明＞ジョー
刀	達只	嗑答拿	嗑答拿	嗑答拿	和着	タチ＞カタナ＞ホウチョウ
書	福蜜	福蜜	佐詩	佐詩	什麼子	フミ＞サウシ＞ショモツ
字	開的	開的	開第	開第	安三那	カイテ＞アザナ
作揖	撒哇利是禮	撒哇立是立	利十之	利十之	禮及	不明＞レイギ
布	木綿	木綿	木綿	木綿	奴奴	モメン＞ヌノ

[4] “乜”は“也”の誤り。

3．大和言葉からウチナーグチへ

提示語	陳侃	琉譯	夏子陽	蕭崇業	傳信録	変更点
下	世莫	失莫	世莫	世莫	昔着	シモ＞シチャ
南	米南米	米南米	米南米	米南米	灰	ミナミ＞フェ
北	乞大	乞大	乞大	乞大	屋金尼失	キタ＞ニシ
羊	非都知	非多只	匹托渣	匹托喳	皮着	ヒトゥジ＞ピトゥザ＞ピザ
鶏	它立	它立	土地	土地	推	トリ＞トティ＞トイ
哇禄撒	哇禄撒	哇禄撒	哇禄撒	哇禄撒	乞煞	ワルサ＞ワッサ
銀	南者	南者	南者	南者	喀膩	ナンザ＞カニ
無	乃	乃	妳	妳	你嬾	ナイ＞ニ＞ニラン

『傳信録』で初めて掲載される提示語と寄語が多いのは、これは岩井1999にあるように徐葆光らの使節団が半年以上の長きにわたって琉球に逗留して蔡温や唐通事らと交流したことや、復命の召見の際に徐葆光自身が琉球に関するより詳細な解説を康熙帝に行う必要があったことと関係があると推察される。変更は概ね正しくなされており、上記挙例だけでも、『傳信録』以前の使録が無批判に先行の使録を引用していた様子が垣間見られる。

§3　寄語が基づく漢字音の体系

3．1　寄語全般の傾向

寄語が基づく漢字音は如何なる体系をもつのか。従来、寄語が基づく漢語音を即座に「官話」音であるとし、その「官話」音を前提として当時の琉球語の姿を再構成していた。しかし、こうした前提は根拠に乏しいばかりか、そこから帰納される琉球語の姿を歪めることになりかねない。

『傳信録』の編者・徐葆光は蘇州府長洲県の出身[5]で、彼の母語は呉語であったと想像される。もちろん「官話」を話すことができたであろう。だが、仮に

[5] 乾隆『呉江県志』巻24科第に「(潘葆光)本姓徐、字亮直。長洲人」とある。

琉球語の発音を漢字で書き写したのが彼だったとしても、「官話」音ではなく、母語である蘇州の発音で記録したこともあり得る。また、「琉球語」の記録者が必ずしも徐葆光とは限らない。Haiboo（海寶）・徐葆光使節団のスタッフは合計318名に及び、その多くは福州で集められた者たちである。書辦が二名、鄭仁譯、馮西熊という引礼通事も乗船していた。彼らの経歴は不明だが、福州の言語で「琉球語」が記された可能性もある。もちろん『傳信録』の「琉球語」の記録者がそれ以外の母語を有していたことも大いにあり得る。その上、異なる母語をもつ複数の漢人が記録に従事した可能性もあり、必ずしも単一の音系により記述されているとは限らない。こうした諸般の可能性を考慮せず、さらに寄語の漢字音の詳細な分析を行わずに「官話」音と即断する、あるいは編者の母語に帰すのは甚だ問題が大きい。よって本稿では、漢語の時代的な変遷や地域差を考慮しながら、漢語方言全般から寄語の基づく漢字音を絞っていく。

では、寄語の基づく漢語の体系を、使用寄語のおおまかな傾向から考えていきたい。一般に寄語がどの言語に基づいているのかが不明な場合、中古音の音韻位置を基準に傾向を見出すのは一つの常套手段である。とりあえず寄語で使われる漢字の韻尾に着目してみよう。

3.1.1　入声韻

『傳信録』の「琉球語」の開音節および促音に対する寄語には中古における陰声韻（ゼロ韻尾、母音韻尾をもつ音節）および入声韻（閉鎖音韻尾をもつ音節）が、「琉球語」の撥音及び有声音声母が後続する音節に対しては陽声韻（鼻音韻尾をもつ音節）の寄語が使用されている。そして、寄語の大多数は陰声韻と入声韻である。琉球語は日本語同様、開音節的な言語であるため、使用寄語が陰声韻と入声韻に偏るのはごく当然のことである。だが、寄語の使用傾向としてとりわけ顕著なのは、旧入声の使用頻度の高さである。

ここで旧入声韻に着目するのには理由がある。それは寄語が基づく漢語が入声韻尾を有しているか否かで、寄語の基礎方言として想定される漢語方言の範囲を絞ることが可能になるからである。入声韻尾があれば南方的、なければ北方的であり、入声を有しているなら、広い漢語方言から約三分の一に絞ること

ができる。

現代の漢語系の言語と琉球語・日本語の音節の長さを比較した時、一般的な傾向として日本語の一音節より漢語の音節の方が長い。当然、漢語の音節の長さは音節の性質によって異なるが、声母＋単母音の組み合わせとなると、旧平声、旧上声、旧去声が長く、旧入声は短い。入声韻は現在では晋語、呉語、閩語、粤語、客家語等に見られるが、北方の大部分の方言では音節末子音は存在せず、他声調に合流して区別がつかなくなっている。よって、北方の話者が琉球や日本語の発音を記述すれば、寄語の発音が入声に偏ることは確率的にはかなり少ないはずである。

だが、前述のように寄語に使われる漢字には旧入声の漢字が多く、延べ数でも寄語のバラエティでも40％を超えている。全ての漢字のなかで入声に属する漢字の割合は極めて低く、約５分の１程度であることを考慮すると、旧入声の漢字が有意に選ばれている傾向が見出せる。よって、寄語を付した漢人の言語には入声が存在したと考えられ、南方方言に基づいて寄語がつけられたと考えられる。

入声は元代の『中原音韻』（1324年）の時代の北京では既に口語レヴェルでの消失が確認されており、清代も同様であった。一方、南京の官話資料には独立した入声があり、/ʔ/という音価であったと考えられている。清代において入声を残している地域は、おおよそ揚子江以南の南方地域である。よって、後に示す各種方言は蘇州、福州、厦門など主に南方方言を選ぶ。

３.１.２　陽声韻

次に陽声韻が使われる項目をみてみよう。陽性韻の寄語は漢語系語彙に対しては撥音を示すために用いられ、和語・琉球語由来の提示語に対しては、後続の子音及び当該子音を有声化させる役割を担っている。しかし、後続の子音を有声化させる例は後述の理由（3.2.5「琉球語の濁音に使われる寄語」参照）により、激減している。また少数の例であるが、母音脱落後のn音や動詞の活用語尾を示すこともある。漢語系語彙の増加やそれに伴う陽声韻の寄語の使用も、『傳信録』の特徴の一つである。

【漢語系語彙】

藕：菱公（レンコン）

象棋：冲棋（チュンギーorチュンジー）

緞：動子（ドンス）

三月：三括子（サングゥツ）

索麺：錯閔（ソーミン）

褥子：福冬（フトン）

分：風（フン）

萬：漫（マン）

【和語・琉球語】

水：閔子（ミズ）　・・・陽声韻の“閔”が“子”の声母を有声化

女：會南姑（ヲナグ）・・・陽性韻の“南”が“姑”の声母を有声化

以下は/N/音を示す例で、この“衾”“琴”“景”はいずれも着衣を表す「衣（キン）」を表現している。

衣裳：衾（キン）

汗衫：阿米琴（アミキン）[6]

冬短衣：木綿景（ムミンキン）

夏短衣：百索景（バショウキン）

【動詞の活用語尾】

聽得：乞介楞（キカレン）

“楞”は「～れん」という可能の終止形を表し、「聴くことができる」という意味を表す。

3．2　確実な例からの推定

では、ここからは具体的な音価を使用した推定に入る。寄語で記される提示

---

[6]　「浴み衣」の意。他に洗浴：阿美的　あみて（浴みて）という例もある。

語の同定に関しては、未解読の項目も数多くあるが、比較的同定が容易な項目も存在する。例えば、琉球語の単母音は歴史的に狭母音化することから、エ段やオ段の音節に比し、狭母音化に関わらないア段、イ段、ウ段の音節の方が確実な同定が得られる。それは想定される発音の種類が少なく、再構成される発音の蓋然性が高いからである。ここではまず、こうした確実な例から寄語が基づく漢字音の体系がどの方言に近いのかを推定する。

第一の段階として、寄語として使われる漢字音と寄語で表現される琉球語を比較検討し、寄語で使用される漢字音がどういう体系をもち、おおよそどの地域の発音に基づいているのか、その大枠を把握する。そして、その発音に近似する漢語方言にどのようなものがあるのかを検討することで、寄語が基づく漢字音の体系を絞っていく。この時、比較対象として用いる漢語はなるべく同時代の資料を用いるが、同時代資料がない蘇州、福州、厦門の地域は現代方言を参照する。同時代資料の一つは当時の北京音の代表として満州資料、北方資料として朝鮮資料、もう一つは「南京」の「官話」を反映すると言われる宣教師資料である。前者では『朴通事諺解』(1677年) の右側音および重刊本『老乞大諺解』(1745年) を使用し、後者は Francisco Varo の"Grammar of the Mandarin Language" (1703) を採用する[7]。『傳信録』の同時代資料を時代順に列挙すると以下のようになる。

1640年代：Francisco Diaz "*Vocabulario de letra china con la explication castellana*" (欧文資料：南京)

1677年：『朴通事諺解』新本 (今本) 系諺解本 (ハングル資料：北方)

1703年：Francisco Varo "*Grammar of the Mandarin Language*" (欧文資料：南京)

1719年：『中山傳信録』「琉球語」

1730年：『満漢字清文啓蒙』(満文資料：北京)

1745年：重刊本『老乞大諺解』新本 (今本) 系諺解本 (『旧刊老乞大』) (ハン

---

[7] Varo の "Grammar of the Mandarin Language" で未見の漢字については、Francisco Diaz "*Vocabulario de letra china con la explication castellana*" (1640's) で代用する。代用したものには*を付す。

グル資料：北方）
1761年：『兼満漢語満洲套話清文啓蒙』（満文資料：北京）
1765年：『朴通事新釋諺解』（ハングル資料：北方）

上記の同時代資料はいずれも対音資料である。現実の音とは乖離した保守的で擬古的な発音を反映する中国の韻書や韻図に比べ、対音資料は現実の発音を反映することが多い。それは実際のコミュニケーションを目的としているからだが、時に注音者の発音に対する規範意識や各資料の基礎方言の違いを反映している場合もある。

3.2.1　ア段音に対する寄語

では、次のような比較的同定が容易な例をみてみよう。もちろん分析対象は、『傳信録』初出の項目である。

提示語：寄語
　褲子：哈加馬

提示語の“褲子”、寄語の“哈加馬”から表現される琉球語は「ハカマ」以外には考えにくい。ならば、“哈加馬”という寄語はそれぞれ、哈≒ha、加≒ka、馬≒maという発音であると予期できる。では、この三文字の発音の条件を満たす漢語方言はおおよそ、どの地域のものか。網掛けになっている発音が、予期される発音に近似するものである。

	北　京	朴通事諺解[8]	重刊本『老乞大』	Varo	蘇　州	厦　門	福 州
哈	/xa/	he	なし	ha	/hɑ/	/ha/	/ha/
加	/tɕia/	gia	gia	kia*	/kɑ/or/tɕia/	/ka/	/ka/
馬	/ma/	ma	ma	ma	/mɑ/or/mo/	/ma/	/ma/

[8] 『朴通事諺解』、重刊本『老乞大』などハングル転写は河野1979の転写法に従う。

上の表で各資料により音の違いが顕著なのは“加”である。おおよそ18世紀の北方方言の発音を示す『朴通事諺解』や重刊本『老乞大』、「南京」官話を示す宣教師資料は口蓋化しておらず/k/音を保っているが、-i-介音の存在により「キャ」という発音になる。もし、北方にしろ、南方にしろ「官話」系の発音を寄語の基礎方言に採用した場合、“褲子”の琉球語の発音は「ハキャマ」となってしまう。上記のうち、“加”を琉球語のカ音に当てる例は『傳信録』以前の資料にもみえるため、この一例のみでは根拠が弱い。上記のような類例を積み重ねる必要がある。以下の例をみてみよう。

提示語：寄語	想定される琉球語
傘　：夾煞	カサ
蟹　：夾煞眉	ガザーミ
長　：那夾煞	ナガサ
紅　：阿夾煞	アカサ
短　：陰夾煞	インカサ

“夾”は『傳信録』で初出の寄語である。ここで使用される“夾”は琉球語の/ka/音に相当すると思われる。では、“夾”の漢語の発音はどうであろう。ここも北方系、「官話」系言語は対応しない。

	北京	朴通事諺解	重刊本『老乞大』	Varo	蘇州	厦門	福州
夾	/tçia/	gia	なし	khia*	/ka?/白or /tçia?	/ka?/白or /kiap/文	/kie?/文or/kei?/or/ka?/

また、語料は少ないものの、漢語方言において発音にバラエティがみられるのは寄語“街”や“介”などの蟹攝字である。カに対し、“街”や“介”、ハに対して“瞎”を当てるのは『傳信録』が初出であるが、それらの例を見てみよう。

提示語　：寄語	想定される琉球語
親戚　：喂街	ウェーカ（イェーカ）
飯碗　：麦介衣	マカリ＞マカイ

戥子　：法介依　　ハカリ＞ハカイ（秤の意）
二十四：膩徂唷介　　ニジュヨッカ
二十二：瞎子介泥泥子　　ハツカニニチ
二十八：膩徂瞎之泥子　　ニジュハチニチ
榕　：茄子埋大[9]　　ガジマル

	北　京	朴通事諺解	重刊本『老乞大』	Varo	蘇　州	厦　門	福　州
街	/tçie/	giei	giei	kiai*	/kɑ/	/ke/or/kue/	/kɛ/
介	/tçie/	なし[10]	なし[11]	kiai*	/kɑ/or/tçia/	/kai/	/kai/
瞎	/çia/	hia	hia	hia入*	/haʔ/	/hueʔ/	/xaʔ/
茄	/tçhie/	kie	kie	khia	/dçia/or/g/	/khiɔ/	/khi/

これらの例では徐葆光の母語である蘇州の発音が極めて高い一致性をみせる。朴通事、老乞大、Varo 等の「官話」系の資料では/ga/や/ka/に近い音声もあるがそれらの漢字は寄語として選ばれていない。もちろん、“街”以下の字が giei や kiai という表記どおりに読んだのかは不明であるが、たとえ iei や iai が字面よりも簡略化された発音であったとしても、他の音節に/ka/という発音が存在するため、/a/に近い音で読まれたとは考えにくい。これら例だけでも、「官話」系の発音を寄語の基礎方言として同定に使用することは危険性が伴う。

3.2.2　ウ段音に対する寄語

では、ウ段音に対する寄語をみてみよう。カ行ウ段のクに対する寄語は従来、“姑”が用いられ、『傳信録』においても引き続き使用されているが、それに“哭”が新たに加わった。スに対しては従来、“思”“司”が用いられてきたが、『傳信録』では「杏：色莫莫（スモモ）」の“色”、「杉：思雞（スギ）」「硯：思子里（スズリ）」の“思”が使われている。そのうち“色”は初出寄語である。ラ行ウ

[9] “大”は衍字か。
[10] “芥”で代用すると giei となる。
[11] ibid

段音の「ル」に対する寄語は“禄”が主に使われてきた。しかし、『傳信録』においては主に“羅[12]”が使われている。

提示語　：寄語　　想定される琉球語

臭　：哭[13] 煞煞　　クササ

杏　：色莫莫　　スモモ

杉　：思雞　　スギ

輕　：喀羅煞　　カルサ

春　：哈羅　　ハル

晝　：皮羅　　ヒル or ピル

夜　：唷羅　　ヨル or ユル

では、新出寄語の“哭”“色”“羅”、および“思”の各資料での発音をみていこう。

	北京	朴通事諺解	重刊本『老乞大』	西儒	Varo	蘇州	厦門	福州
哭	/kʰu/	ku	なし	ko	ko入	/khoʔ/	/khou/文/khau/白	/khouʔ/
色	/sɤʔ/	se	se	se	se	/sɤʔ/	/sik/文/sat/白	/saiʔ/
思	/sɪ/	sa.	sa.	çu	çu	/sɪ/	/su/文/su/白	/sy/文/søy/白
羅	/luo/	lo	lo	lo	lo	/ləu/	/lo/	/lɔ/

このように、ウ段音に関しては、どの方言が近いとも言えない状況となっている。ただ、厦門の“思”/sy/文 /søy/白や福州の“色”/saiʔ/は想定される琉球語の発音との差が相対的に大きいように思われる。それには琉球語のウ音に相当する漢語の発音が当てにくかったからかも知れない。現代の琉球語のウ段母音は非円唇前舌母音の/ɯ/であるため、当時もこれに近かったものと考えら

[12] “羅”は『琉球館訳語』で「回去：慢多罗」という例が一つのみ、見られるが後の資料には継承されていない。また『傳信録』において“羅”はロに由来する寄語が多い。

[13] “哭”は「初九：之搭之哭古魯」という複合語を除き、全て語頭に用いられている。漢語では“哭”は帯気音、“姑”は不帯気音である。これは漢人にとっては琉球語の語頭のク音が帯気音に聞こえたことを反映しているのかも知れない。こうした漢語の帯気音と不帯気音を使い分ける傾向はタ（語頭“他”、語中“韃”）、ト（語頭“禿”“托”“掐”、語中“多”）などにも見出せる。

れる。/ɯ/音を持たない漢人が琉球語の/ɯ/音を記述する際、/u/、/o/、/ɔ/、/ɤ/、/əu/のうちどの音を最も近いと見なすのか。例えば、舌の位置に着目すれば琉球語の/ɯ/音は/u/が近いが、円唇性については開きがある。よって、ウ段音の事例は寄語の基礎方言を特定する際には重要視することが困難である。

3.2.3　イ段音に対する寄語

では、次に、イ段音であることが確実な提示語に対する寄語の発音について、寄語の発音をみていこう。

提示語	：寄語	想定される琉球語
飯碗	：麦介衣	マカイ
戟子	：法介依	ハカイ
木	：鷄	キ
朝	：阿噶子吉	アカツキ
秋	：阿紀	アキ
掃箒	：火氣	ホーキ
白	：稀羅煞	シロサ
地	：池	チ or ジ
臂	：非之	ヒジ
日	：飛	ヒ
二十三	：膩徂三泥子	ニジュウサンニチ
蝦	：一必	イビ or エビ
蟹	：夾煞眉	ガザーミ
里	：利	リ

	北京	朴通事諺解	重刊本『老乞大』	Varo	蘇州	厦門	福州
衣	/i/	i	i	y	/i/	/i/文or/ui/白	/i/
依	/i/	i	i	y*	/i/	/i/	/i/
鷄	/tçi/	gi	gi	ki or ky	/tçi/	/ke/文or/kue/白	/kie/

吉	/tɕi/	gi	gi	kie	/tɕiɪ/	/kiɛt/	/keiʔ/
紀	/tɕi/	gi	gi	ki*	/tɕi/	/ki/or/khi/	/ki/
氣	/tɕi/	ki	ki	k^hy	/tɕi/	/k^hi/文or/k^hui/白	/k^hei/文or/k^huei/白
失	/ʂi/	si	si	ʂi[14]入	/sɤʔ/	/sit/	/seiʔ/
稀	/ɕi/	hi	なし	hi	/ɕi/	/hi/	/xi/
池	/tʂ^{h}i/	ci	なし	chi*	/zɥ/	/ti/	/tie/
之	/tʂi/	ǰi	ǰi	chi	/tsɥ/	/tsi/	/tsi/
膩	/ni/	なし	なし	ni*	/ni/	/li/	/nei/文or/nøi/白
非	/fei/	vi	va.i	fì or fy	/fì/	/hui/	/xi/
飛	/fei/	vi	なし	fi*	/fi/	/hui/文or/pe/白	/puoi/
必	/pi/	bi	bi	pie入	/piɪʔ/	/pit/	/peiʔ/
眉	/mei/	mại	なし	moei	/mi/or/me/	/bi/文or/bai/白	/mi/
利	/li/	li	li	lì	/li/	/li/文or/lai/白	/li/

網掛けになっているのは、提示語の意味と寄語のおおよその発音から考えて、基礎方言として妥当性が高い発音である。あくまでも現代方言との比較においてであるが、上記のように、徐葆光の母語と思しき蘇州語、そして南京の発音が比較的よく合致する。琉球語のイ段音に対する寄語の漢語方言による発音は、厦門、福州といった南方ほど、想定される琉球語との齟齬が大きい。特に厦門、福州の地域において『傳信録』初出の“鷄”“紀”“膩[15]”などの発音に径庭を存していることは、重要視されてよいだろう。だが、寄語の基礎方言を蘇州方言であると断定するには一つの障碍がある。それは現代の蘇州方言では団音に由来する寄語が口蓋化し、聴覚印象ででは極めて「チ」に近いことである。

[14] Varoの原文はxiとなっているが、これは/ʂi/の発音である。
[15] 蕭崇業の「夷語」に“三：膩子”の例が見えるが間違いであろう。

3.2.4　清代の方言における尖音、団音

ここで同時代資料における尖音、団音をみる前に、まず現代の分合状況を確認してみよう。北京では合流し、蘇州と福州（厦門）では分けられている。だが、以下のように蘇州と福州では非合流でも音価が異なり、蘇州では団音は破擦音化して/k/の音価を失っているが、福州（厦門）では/k/の音価を保っている。

現代方言における尖音・団音の分合状況

	北 京	蘇 州	福州（厦門）
尖 音	ts-	ts-	ts-
団 音	tç-	tç-	k-

歴史的に北京語における団音の破擦音化の萌芽は17世紀にあった[16]。そして北京語を示すと思われる『満漢字清文啓蒙』（1730年）や『兼満漢語満州套話清文啓蒙』（1761年）では現代音と同じ破擦音になっていたものと考えられる[17]。だが、満文資料においては、上記資料よりも後に成立した資料『増訂清文鏡』（1771年）に尖音・団音の区別が「復活」している。尖音と団音の合流を示す『圓音正考』（1743）もそもそも合流してしまった両音を分ける必要を説いた一本である[18]。発音の伝統を守ることを目指して注音がなされる傾向も、漢語関連の資料には往々にして見られるため、この点への注意が必要である。

一方、ハングル資料においては、1677年の『朴通事諺解』右側音では、尖音・団音をはっきりと区別している。重刊本『老乞大諺解』（1745）においては、一部の合流が認められるも、破擦音化していないものもある。その後、大きな改訂が行われた『朴通事新釋諺解』（1765年）においては、以下のように軟口蓋音が口蓋化していないものもある。

---

[16] 1662年の琉球国王の官印で「琉球」を満州文字で lio cio と記していることからもそれが窺える。その後、発音の規範化により資料によっては現実の発音とはかかわりなく尖音と団音が区別されることもある。事実、満文文献における「琉球」の発音はのちに lio kio と標記されるようになる。

[17] 落合1989参照。

[18] 藤堂1960参照。

gi：紀、己、吉、季、極、係
ki：乞、棄、契、其
ji：几、既、計、給、鶏、餓、稽、急、計
ci：起、気、騎、器、欺、豈、棋

因みに『傳信録』で初めて使われる寄語“紀”“吉”“几”は満州資料では全て破擦音化し、朝鮮資料では“紀”“吉”は軟口蓋音、“几”は破擦音で記されている

では、「南京」の方言を示す資料はどうか。明末・清初の宣教師による官話資料にも、これらの発音に関する記述が得られる。これらの資料群においては、『西儒耳目資』以来、Francisco Diaz “*Vocabulario de letra china con la explication castellana*”、Francisco Varoの“*Grammar of the Mandarin Language*” など一貫してほぼ同じ音韻体系が継承され、それは1859年のThomas Wadeの『語言自邇集』の出現まで続いた[19]。宣教師の資料では尖音・団音は現実の音声変化に影響を受けることなく、一貫してts-/k-という形式で保たれているが、それは『傳信録』の時代も同様であったと考えられる。

さらに清代の厦門方言、福州方言では、尖音・団音の区別はどうなっていたのであろうか。これに関しては残念ながら音価を知る資料がない。しかし、厦門方言、福州方言は現代でも区別を保ち、さらに団音は破擦音化せずk音を有しているので、当時もそのような状態であったと思われる。一方、蘇州方言はどうであろう。現代蘇州方言は尖音・団音は微妙な差異ながら済：tsi（尖音）、計：tɕi（団音）という区別を保っている。よって18世紀前半においても区別をしていたことは確実である。しかし、その区別が現代と同様だったのか、済：tsi（尖音）、計：ki（団音）のような団音が破擦音化する前の段階だったのか、当時の音価までを伝える資料がない。

筆者は18世紀前半の蘇州語は、団音も/k-/という音価であったのではないかと推測する。その理由は、現代で尖団が完全に合流している北京語が、18世紀前半は合流したばかりの状況、あるいは過渡期であったことを考えると、区

[19] 高田2001参照。

別を保っている南京より南方に位置する18世紀前半の蘇州が tsi/ki という状況で尖団を保っていたことも大いにあり得るからである。むしろ北京に先駆けて破擦音化を完了していたとは考えにくい。

筆者の想定する18世紀前半の分合状況

	北 京	蘇 州	福州（厦門）
尖 音	tɕ-	ts-	ts-
団 音	k-～tɕ-	k-	k-

ただ、「琉球語」の筆記者が徐葆光であった場合、この推測もあながち的外れではないように思える。蘇州府という南方に生まれ、もともと尖音と団音の区別を有し、科挙を第一甲第三名という極めて優秀な成績で合格した徐葆光には、「正音」に対するある種の規範意識があったことは想像に難くない。そこでの規範とは当然、尖音と団音を明確に区別することにあったと思われる。

3.2.5　琉球語の濁音に使われる寄語

確実な例から推定した結果、寄語の基礎方言を蘇州方言とした場合の一致性が高いことを述べた。ここでもう一つ、琉球語の有声破裂音子音に対する寄語の傾向について考察しよう。少数の例外を除き中古の全濁音声母に由来する寄語は、琉球語の有声破裂音子音、いわゆる濁音に対して使われることが多い。中古の全濁音声母の音価を保持している現代方言は呉語一帯の地域であり、今回比較対象としたなかでは蘇州語がそれに当たる。

そして実際、寄語の基礎方言を蘇州語と想定した場合、琉球語の濁音に蘇州語の有声音声母を当てたと思しき例が多数みられる。そのため、従来の資料で琉球語の濁音を表記するために前の寄語に陽声韻を使うといった手法（「飯：翁班尼」の“翁”）が、『傳信録』では数例を残して減少していることも、有声声母を使った濁音表記の増加に伴う措置であると考えられる。

提示語	：寄語	想定される琉球語	中古声母と現代蘇州語による発音
錢	：層	ゼン	“層”中古從母 /zən/
門	：濁	ジョー	“濁”中古澄母 /zoʔ/
緞	：動子	ドンス	“動”中古定母 /doɴ tsɪ/
地	：池	チorヂ	“池”中古澄母/zɥ/
妓	：俗里	ズリ	“俗”中古邪母/zoʔ li/
鍋	：那脾	ナビ	“脾”中古並母/na bi/
蒜	：非徒	ヒル>フィル>フィドゥ	“徒”中古定母/fi dəu/
被	：烏獨	ウードゥ[20]	“獨”中古定母/u doʔ/
朋友	：獨需	ドゥシ	“獨”中古定母/doʔ si/
小孩子	：歪拉培	ワラベorワラビ	“培”中古並母 /huɑ la bɛ/
象棋	：冲棋	チュンギー	“棋”中古群母/tshoŋ dʑi/
面盆	：汗儞及里	ハンジリ[21]	“及”中古群母 /ɦø ni dʑiəʔ li/
三十	：三徂泥子	サンジュニチ	“徂”[22] 中古從母/san dʑəu ni tsɪ/
石榴花	：石古魯	ザクロ	“石”中古禪母/zɑʔ kəu ləu/
扶桑花	：菩薩豁那	ブサハナ	“菩”中古並母/bu saʔ huaʔ na/

例外的に琉球語の濁音と寄語の全濁音が対応しないこともあるが、その場合でもかならず寄語には全清声母（不帯気音）に由来する寄語が使われ[23]、次清声母（帯気音）が使われる例はみあたらない。

§４　『傳信録』が示す琉球語について

『傳信録』で変更が加えられた項目を仔細に観察すると、『混効験集』などの同時代資料に見られる言語変化と同様の状況を確認することができる。以下

[20] 提示語は掛け布団の意。『沖縄語辞典』にも/ʔuudu/とある。
[21] 『沖縄語辞典』に hanziri で「たらい。桶の底の浅いもので、半切りの意」とある。
[22] 現代蘇州語の発音は不明だが、中古音で從母で有声破裂音に属するため、蘇州語でも有声音で発音されると思われる。
[23] “鏡子：喀敢泥”（カガミ）、“竹爿：兀執”（ウージ）がその例にあたる。

に特徴的な事柄を列挙してみよう。

4.1　琉球語のキとチについて

琉球語のキとチがどのような発音であったかをみる前に最初に確認すべきことがある。それは『傳信録』「琉球語」におけるキとチについて、どのような条件が整えば、琉球方言のカ行イ段音「キ」が口蓋化し、タ行イ段音「チ」と合流していると言えるのか、ということである。この判断を下すとき、まず寄語の漢語方言に尖音・団音（精系声母・見系声母）の区別が存在する場合としない場合を分けて考える必要がある。

まず寄語の漢語方言に尖音・団音（精系声母・見系声母）の区別が存在する場合、琉球語のキとチが合流していると見なすためには琉球語のカ行イ段音に対し、尖音（精系声母）で発音を表記していることが確認されなくてはならない。例えば、“気”という提示語に対し、尖音に由来する音（例えば“七”“妻”“子”“之”など）が寄語として選ばれていることが条件となる。しかし、こうした例は『傳信録』やそれ以前の資料では見あたらない。

因みに『傳信録』以降の『琉球入学見聞録』に一例のみ、水：媚吉（ミズ）という例がある。しかし、これは“吉”という団音に由来する漢字を使用しているため、寄語の漢語音系が尖音・団音の区別を失っている根拠とはなり得ても、琉球語のキとチが合流している証拠とはならない。

次に、寄語の漢語方言に尖音・団音の区別が存在しない場合はどうか。この場合、琉球語のカ行イ段音に対して尖音あるいは団音で発音を表記し、しかも尖音で表記される頻度が高い場合に限られる。

以下の例を見てみよう。カ行イ段音・キとタ行イ段音・チに関連する項目については、カ行に対しては中古見系の声母（軟口蓋破裂音 /k-//k^{h}-/）をもつ漢字が使われ（ex. 紀、吉、几、其、鷄）、タ行には端系（ti）、章系（ts）、精系の声母（舌音および破擦音）の寄語が用いられている（ex. 池、之、子、齊）。このうち、“紀”“吉”“几”/“池”“齊”が『傳信録』で初めて使われる寄語である。

キ

提示語：寄語	想定される琉球語	寄語の中古音韻位置	蘇州語の発音
秋：阿紀	アキ	“紀”見母・止韻・上声	*/ki/>/tçi/
朝：阿噶子吉	アカツキ	“吉”見母・失韻・入声	*/ki/>/tçi/
竹：托几	タキ	“几”見母・旨韻・上声	*/ki/>/tçi/

チ

			蘇州語の発音
地：池	チ or ヂ	“池”澄母・支韻・平声	/zɥ/
奶：齊	チ	“齊”從母・齊韻・平声	/zi/
東：窟之	クチ	“之”章母・之韻・平声	/tsɥ/

寄語の使用傾向をみると、両者には棲み分けがされており、例外はない。よって両者に音声的区別が持っていることは明らかである。団音に由来する寄語を使用している状況からみると、琉球語においてキは未だチに合流していない状況であったと結論づけられる（同時代資料の発音に関しては、２.２.３イ段音に対する寄語を参照）。

『琉球国由来記』（1713）には少数ながらキがチに、ギがヂ（ジ）に変化した例がみえるので、カ行イ段音の破擦音化はこの頃から徐々に増えていき、李鼎元の『琉球譯』（1800年）においておおよその合一をみたと考えられる[24]。よってこの間の約二世代にわたりカ行イ段音の口蓋化が進行したものと思われる。

４.２　r音の脱落とr音のd音への変化

『傳信録』の「琉球語」では、リに対応するr音が脱落する例がみられる。これは『混効験集』（1711年）にもみえる傾向である。

[24] 石崎2001参照

【脱落例】

提示語：寄語	想定される琉球語	現代蘇州語の発音
茉莉：木一乖	ムリクヮ＞ムイクヮ	/moʔ iɪʔ kuɛ/
鷄　：推	トリ＞トゥイ	/tʰɛ/
戢子：法介依	ハカリ＞ハカイ	/faʔ kɑ i/
抛球：馬一	マリ＞マイ	/ma iIʔ/
泊　：土馬伊	トマリ＞トマイ	/tʰəu ma i/
冬瓜：失布衣	シブリ＞シブイ	/si pu i/
西瓜：烏貽	ウリ＞ウイ	/u i/
枕　：馬括[25]	マクラ＞マクヮ	/ma kuaʔ/

【脱落していない例】

提示語：寄語	想定される琉球語	
妓　：俗里	ズリ	/zoʔ li/
里　：利	リ	/li/

また、「油：阿呸打」の如く、ra が da に変じている例も見受けられる。「油」は『混効験集』(1702-1711) においては「アムダ」と記述されていること同じ状況が見られる。もう一つ。琉球語のにんにくを表す提示語「蒜（フィル)」に対し、「蒜：非徒」と当てる例がみられる。“徒”は前述のように蘇州方言では/d-/の声母、他の方言では/t-/となっており、もし蘇州を基礎方言とするならこれもr音がd音に変化した例とみなすことができる。

4.3　ハ行・バ行音について

ハ行音に関しては、概ね唇歯摩擦音、および喉音系の寄語が選ばれるが、両唇破裂音の例も見られる。現代方言においては、例えば、「葉」/hwa:/のように、唇音性を保っている単語がある。以下の「葉：豁」の例にみるように、寄

[25] 『混効験集』で確認できる kur が qkw になる現象（お枕：おまつくわ）については、“馬”が入声ではないので、変化の有無は確認できない。

語の基礎方言が蘇州方言であるなら、“豁”の発音は/huaʔ/に近い発音になるため、当時の琉球語の発音としては円唇性を残していると判断できる。

提示語	：寄語	想定される琉球語	現代蘇州語の発音
褲子	：哈加馬	ハカマ	/hɑ kɑ mɑ/
花	：豁那	ファナ	/huaʔ na/
葉	：豁	ファ	/huaʔ/
鼻	：豁納	ファ	/huaʔ naʔ/
臂	：非之	フィジ	/fi tsɥ/
鍋蓋	：福大	フタ	/foʔ dɑ/
多	：屋火煞	ウフサ	/oʔ həu saʔ/or/uɤʔ həu saʔ/
掃箒箒	：火氣	フーキorホーキ	/həu ki (tçi) /
冬瓜	：失布衣	シブイ	/sɤʔ pu i/
晝	：皮羅	ピル	/bi ləu/
羊	：皮着	ピージャ	/bi tsɑʔ/ or/bi zɑʔ/
紙	：瞎皮	カピ	/haʔ bi/

喉音の寄語は“豁”“火”、唇歯摩擦音は“非”“福”を使っている。

	豁	非	福	皮	火
蘇　州	/huaʔ/	/fi/	/foʔ/	/bi/	/həu/

バ行ウ段には両唇破裂音系の漢字が使われている。ハ行音イ段に関しては、「晝：皮羅（ピル）」のように、『傳信録』以前の資料で用いられた両唇破裂音声母を持つ寄語が当てられる例もある。このうち、新出の寄語は「羊：皮着（ピージャ）」である。晝：皮羅（ピル）は、それ以前の資料は「晝：必禄（ピル）」（琉球館訳語）、「晝：皮禄（ピル）」（陳侃、夏子陽）などと書かれている。『傳信録』では、ルを表す寄語が“禄”から“羅”に置き換わっているだけで、ピは依然として“皮”になっている。これは単に先行資料を書き写したものか、あるいは現実の発音を反映させて“皮”字をそのまま残したものか、判断が分かれるところである。琉球語のヒ音に対するその他の例では、全て“非”“飛”など唇

歯摩擦音[26]の寄語が選ばれている。だが、両唇破裂音の例が「晝：皮羅（ピル）」の他に、『傳信録』で初出の「羊：皮着（ピージャ）」という例も存在することからすると、この資料から得られる琉球語のハ行イ段音は一部の単語で/p/音を保っていた、とみるのが穏当である。

寄語を見る限り、ハ行に関しては/h-/、/hw-/、/f/（/ɸ/を表したもの）、/p/という子音が併存していることになる。これは音環境によってハ行の音価が異なっていることを示すと同時に、本土から流入した語彙がそのままの発音で使用されていた状況を反映すると見られる。

4.4　前舌母音化が認められる語

現代琉球方言ではウ段音がイ段音のような前舌母音となる例がある。「水」がその例にあたるが、『傳信録』の「水」の項目には、現代と同様の現象が確認できる。

『傳信録』では「水：閔子」となっているが、それ以前の資料ではいずれも「水：民足」と書かれている。“足”は中古の音韻位置では燭韻入声に属するため、歴史的にも漢語の各方言も何らかの円唇性を有する漢字である。それが『傳信録』では“子”精母・止韻・上声という語に置き換えられている。『傳信録』のなかでの寄語“子”は、以下のような、イ段音の母音をもつ語に使用されている。

提示語：寄語	想定される琉球語	現代蘇州語の発音
二十三：膩徂三泥子	ニジュサンニチ	/ni dʑəu san ni tsɪ/
二十六：膩徂六姑泥子	ニジュロクニチ	/ni dʑəu loʔ kəu ni tsɪ/
二十七：膩徂失之泥子	ニジュシチニチ	/ni dʑəu si tsɥ ni tsɪ/
二十八：膩徂瞎之泥子	ニジュハチニチ	/ni dʑəu haʔ tsɥ ni tsɪ/
三十：三徂泥子	サンジュニチ	/san dʑəu ni tsɪ/

ただ、これらの例はいずれも語の末尾に使われているため、イ段音ほど非円唇性が強くなかったかも知れない。同時代資料と方言の発音をみてみよう。

---

[26] 厦門、福州の文読音では喉音の/hui/、/xi/となる。

	北 京	朴通事諺解	重刊本『老乞大』	Varo	蘇 州	厦 門	福 州
子	/tsɿ/	ja̤	ja̤	tsu	/tsɿ/	/tsu/文/tsi/白	/tsy/文/tsi/白

現代蘇州方言の発音では中舌母音の発音となっているため、当時の発音としては「ミジ」に移行する前の「ミズィ」という発音であった可能性もある。

もう一つ、前舌母音化していることを示す例がある。「墨：細米（シミ）」という項目である。それ以前は「墨：思墨」（陳侃、琉球館訳語）や「墨：司默」（夏子陽、蕭崇業）と表記されていたが、「墨：細米（シミ）」に変更が加えられた。“細”は『傳信録』初出の寄語である。『傳信録』において“細”は「四十：細徂（シジュ）」という語にも使われているため、こちらの方は「ス」や「スィ」ではなく、「シ」音に当てられていると思われる。漢語の“細”（心母・霽韻・去声）は先の「水」で使われた“子”より、ずっと非円唇性が強い。

同時代資料や福州方言を除くほとんどの漢語方言での“細”の発音は“思”や“司”に比べ非円唇性の強い発音で、聴覚印象の上ではより「シ」に近い。よって、「墨：細米」の例は、当時すでに前舌母音化した語が存在したことを根拠づけるより有力な事例となり得る。

	北 京	朴通事諺解	重刊本『老乞大』	Varo	蘇 州	厦 門	福 州
思	/sɿ/	sa̤	sa̤	su	/sɿ/	/su/文/su/白	/sy/文/søy/白
細	/çi/	si	si	si	/si/	/se/文/sue/白	/sa/

4.5　寄語“呅”の発音に関連した琉球語

現代琉球方言では鼻音 +i/u の音節において、母音が脱落して鼻音が音節主音になる場合がある。その例として「胸」の muni>’ ɴni という変化が挙げられるが、『傳信録』にも同様の現象が観察される。

『傳信録』の“胸”の項目には「胸：呅尼」のように書かれる。現代蘇州方言ほか多くの方言では“呅”は/ŋ/の如く母音を伴わない音節主音的子音（“声化韻”）となっていることから、“呅”は琉球方言の/N/を表現していたと考えられる。これは現代首里方言で「重い」を/ʔNbusaN/と言うことからも裏付けら

れる。以下に“呿”の寄語を含む項目を挙げる。

提示語：寄語	想定される琉球語	現代蘇州語の発音
胸　：呿尼	ンニ	/ŋ ni/
重　：呿卜煞	ンブサ	/ŋ poʔ sa/
擔桶　：呿格	ンケ[27]	/ŋ kɑ/
我　：乞呿	ワン	/uaʔ ŋ/
瓦礶　：之呿	チン[28]	/tsɥ ŋ/
瓢　：彌呿	ミン[29]	/mi ŋ/
油　：阿呿打	アンダ	/a ŋ tã/
木頭：梅呿梅拿乃[30]		
牙刷：番呿脚鷄母魯[31]		

先に ra 音の da 音への変化に関連して、「油：阿呿打」の例を紹介したが（§３　3.2参照）“呿”の発音が音節主音的子音であるなら、「油」は実際には/anda/のように発音されたと考えられる。一方、「醤：彌沙」（「味噌」の意味か？）のように、現代首里方言では'NSO となっている語が『傳信録』では未だ/mi/音を保っているものもある。

その他、「我：乞呿」のようにいわゆるはねる音/N/を示している。

27　現代首里方言では'uuki となっている。“呿”はしばしば“五”と混用されている。

28　提示語は「素焼きの壺」の意。寄語の発音は、ツボの発音において、/tsɪ/が前舌母音化して/tçi/となり、ボの発音が/bo/>/bɯ/>/mɯ/>/m/のように何らかの形で転訛したものを、漢人が書き取った結果かも知れない。『見聞録』では「瓦礶：哈阿美」（“哈”は“喀”の誤記か）のように「カメ（甕）」由来の語に置き換えられている。

29　未詳語。

30　“木頭”は「木、木材」の意。「梅呿梅」は「梅：呿梅」という提示語と寄語の組み合わせと考えられる。漢籍は白文の縦書きのため、こうした間違いが生じやすい。

31　『琉球入学見聞録』には項目なし。未詳語。

§5　おわりに

これまで述べてきたように、『傳信録』の寄語は徐葆光の母語である蘇州府の言語を基礎にしている可能性が高い。そして、『傳信録』における初出項目や初出寄語の反映する琉球語は、軟口蓋狭母音が未だ口蓋化していない段階であったことや、r音の脱落、r音のd音への変化などの琉球語の史的変遷を考察する際の言語事象も確認された。

これまで外国語資料を使った琉球語の研究史において、『傳信録』は重用されていたとは言い難い。それは未詳語の多さ、継承された提示語や寄語の多さに加え、他の資料よりも時代的に下っていることで言語資料としての価値を見出しにくかったことなどが挙げられよう。だが、上記のように増補された箇所を仔細に見ていくことで琉球語の史的変遷を知るための一資料として位置づけることも可能となる。

これまでの考察を踏まえると、果たして『傳信録』はかつての共通中国語であった「官話」音を示す資料たり得るのだろうか。答えは否である。言うまでもなく『傳信録』の「琉球語」は琉球の言語について書かれた資料であり、中国の「官話」を記述したものでも、「官話」音で記されたものでもない。では、他の使録における「夷語」は「官話」資料たり得るのか。これらについても今後、詳細な検討が必要である。

参考文献

Francisco Varo（著）, W. South Coblin（編集）“Joseph abraham Levi（編集）Francisco Varo's Grammar of the Mandarin Language (1703)” John Benjamins Publishing Co 1999年

李荣主编≪南京方言词典≫江苏教育出版社 现代汉语大辞典・分卷 1995年12月

李荣主编≪厦门方言词典≫江苏教育出版社 现代汉语大辞典・分卷 1998年12月

李荣主编≪福州方言词典≫江苏教育出版社 现代汉语大辞典・分卷

1998年12月
李荣主编≪明清吴语词典≫上海辞书出版社　2005年
北京大学中国语言文学系・语言学教研室编≪汉语方音字汇≫第二版 文字改革出版社1989年
石崎2001：石崎博志「『琉球譯』の基礎音系」、『沖縄文化』92号、沖縄文化研究所、2001年９月 pp1-24
岩井1999：岩井茂樹「徐葆光『中山伝信録』解題」（夫馬進『増訂使琉球録解題及び研究』榕樹書林1999年10月 pp.91-105所収）
遠藤光暁（編）『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』（中国語学研究『開篇』単刊No.３）好文出版, 1990年
高橋1991：高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院　1991年
落合1989：落合守和「翻字翻刻《兼満漢語満州套話清文啓蒙》（乾隆26年、東洋文庫所蔵)」『言語文化接触に関する研究』第１号。アジア・アフリカ言語文化研究所 1989年
慶谷壽信等編『「朴通事諺解」索引』 采華書林　1976年
河野1979：河野六郎「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」『河野六郎著作集』第１巻(pp.96-7) 所収　平凡社
高田2001：高田時雄「トマス・ウェイドと北京語の勝利」『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会　pp.127-142 2001
高橋1991：高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院　1991年
藤堂1960：藤堂明保「ki-とtsi-の混同は18世紀に始まる」『中国語学論集』汲古書院
東條操編『南東方言資料』刀江書院 1969
原田禹雄訳注『徐葆光　中山傳信録　新訳注版』冊封琉球使録集成７　榕樹書林　1999年
山崎1990：山崎雅人「『[満文] 大清太祖武皇帝実録』の借用語表記から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について」『言語研究』98. 1990年
和田1987：和田久徳「『中山傳信録』の清刊本と和刻本」『放送大学研究年報』第５号　pp.1-14所収